浜松城跡 43 次調査の概要

2022 年 3 月

浜松市教育委員会

１.浜松城跡の概要

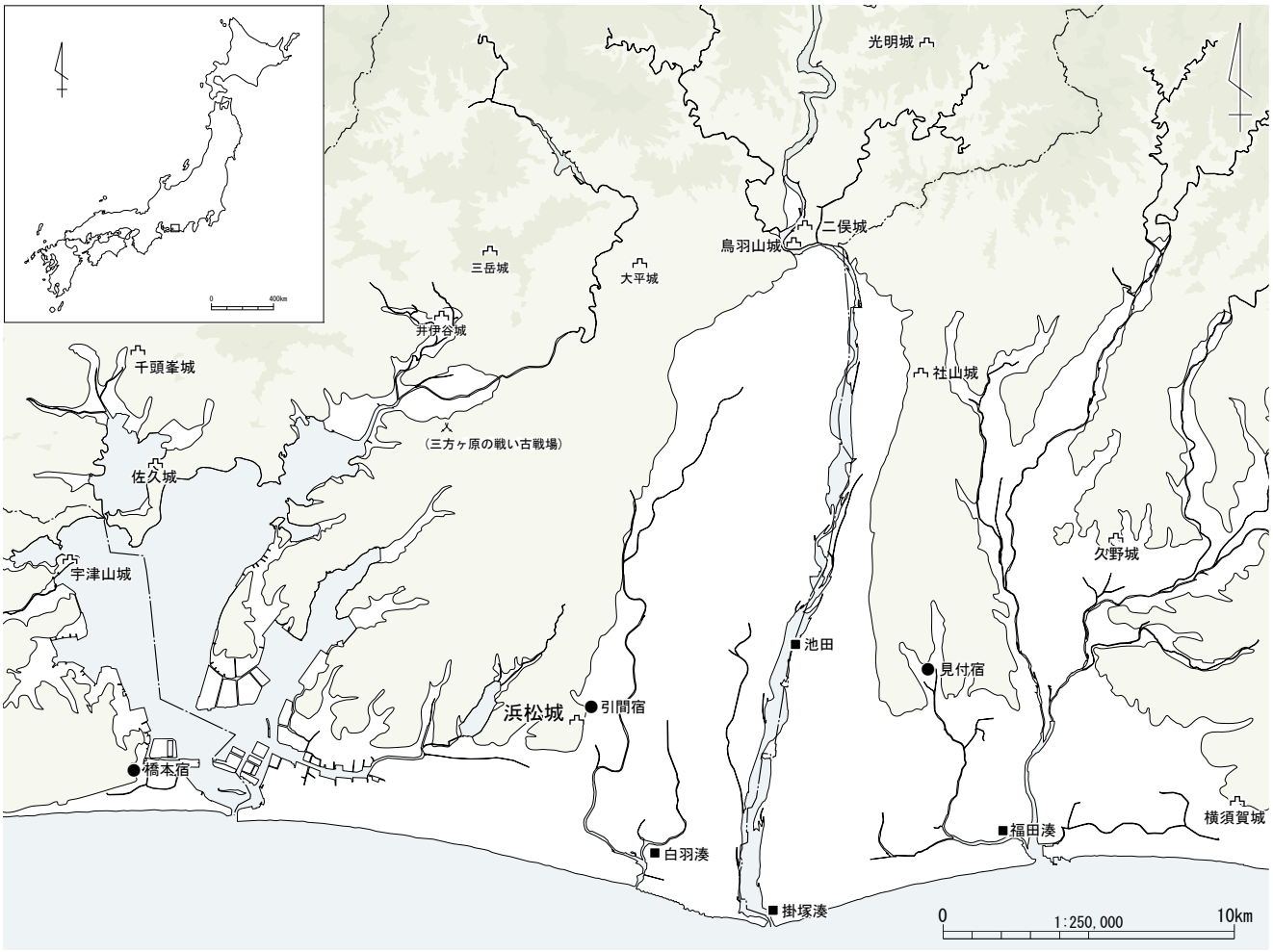
浜松城の歴史　戦国時代の城郭が数多く分布する遠江は、今川氏、徳川氏、武田氏が争った地域であり、浜松城はその舞台のひとつです。引間城の時期を含む浜松城およびその周辺の動向は、時代や城主の変化などをもとに１ー６段階に分けて整理できます。また、城郭として使用される前には古墳の造営などが行われており、この時期を０段階とし計７つの段階に分けて土地利用の履歴を捉えることができます。

第０段階は、引間城の時期を含む浜松城が築城されるよりも前の古墳時代や古代・中世前半を中心とした時期です。古墳時代には作左山横穴をはじめとした古墳の造営が行われました。また浜松城跡や浜松城下町遺跡からは、須恵器や土師器が一定量出土し、古代に集落が造営されたことが明らかです。

第１段階は、引間城を地域拠点とし、今川氏等が領有した段階です。浜松城の前身城郭である引間城の築城時期は明確ではないものの、16世紀前半には今川氏配下の飯尾氏が３代にわたり城主を務めました。引間城は江戸時代の絵図において、土塁と堀に囲まれた４つの正方形状の曲輪が表現され「古城」と記載された地区にあたります。現在、元城町東照宮が所在する北西の曲輪では、16世紀代の遺構や大量のかわらけが出土しており、今川氏領有期や徳川氏領有期に城郭の一部として機能していたことが明らかです。

第２段階は、戦国時代後半（徳川氏領有期：1570～1590）です。徳川家康は元亀元年（1570）、岡崎城から引間城へと拠点を移し、西側の丘陵へと城郭を拡張し、浜松城と改称しました。武田勢力との軍事衝突に備え、徳川家康が浜松城をたびたび改築した記録が残されています。徳川家康在城期における浜松城は、江戸時代の天守曲輪・本丸・二の丸・古城・西端城曲輪・出丸・作左曲輪・三の丸の一部を中心とした範囲と考えられます。

第３段階は、安土桃山時代（堀尾氏領有期：1590～1600）です。徳川家康の関東移封に伴い、浜松城に豊臣系大名である堀尾吉晴が入り出雲に移封されるまでの10年間です。堀尾吉晴は、高石垣の構築や瓦葺き建物の

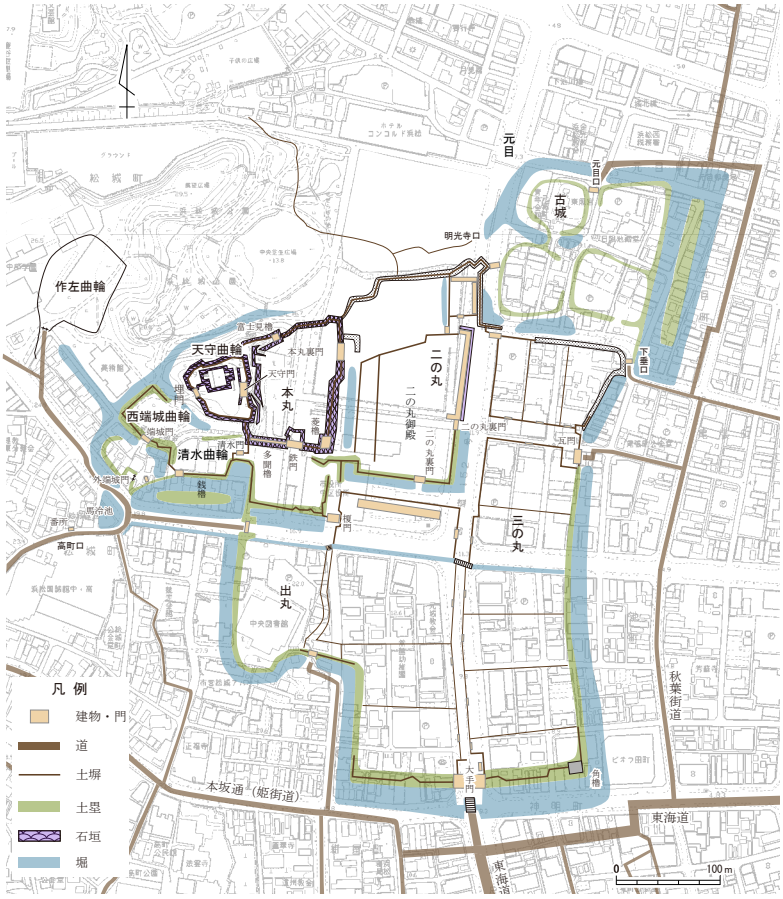


浜松城跡の位置と周辺の城跡

建築を行い、浜松城を織豊系城郭へ改築しました。発掘調査の成果から堀尾氏在城期の浜松城には天守や南東隅に櫓が存在した可能性が高く、天守曲輪を中心に江戸時代の絵図に描かれた様子とは異なる城郭景観が広がっていたことが明らかになりました。

第４段階は、江戸時代（譜代大名領有期：1603～1868）です。江戸時代の浜松城主は譜代大名の十家二十二代を数えます。歴代の城主により城域の拡大や改修が行われたことが文献史料や発掘調査成果から明らかです。二の丸御殿の建設、三の丸の拡張などは、江戸時代の早い段階で行われたとみられます。江戸時代には、城郭の役割は軍事拠点から政務空間へと変化しました。軍事的な機能を持つ天守曲輪などの中枢部は象徴的な空間へと変化し、二の丸が中枢を担いました。

第５段階は、明治時代から太平洋戦争終戦までの期間です。浜松城の建物や土地は、「廃城令」に先立ち、明治５年（1871）から払い下げが進められ、城郭に関わる建造物はすべて失われました。二の丸や三の丸は民有地化に伴い、大規模な開発が行われ市街地となりました。天守曲輪は展望台に茶店が付属する遊興施設、本丸は寺や学校用地として使用されました。



浜松城跡復元図

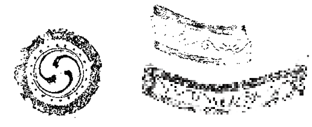
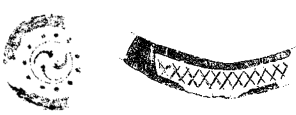
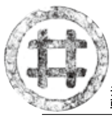
アジア太平洋戦争時は市街地も空襲の標的となり、昭和20年（1945）６月の浜松大空襲によって、市街地の木造建築のほとんどが焼失し、近世城下町からつづく景観が失われました。

第６段階は、アジア太平洋戦争の終戦から現在までです。「浜松こども博覧会」を契機に浜松城周辺は公有地化が進められ、浜松城公園が開設されました。昭和33年（1958）に復興天守閣が建設され、その翌年、昭和34年（1959）には浜松市指定文化財の第１号として浜松城跡が指定されました。

戦後復興期を中心に、浜松城跡には公共施設が集中しましたが、体育館や小学校などの施設移転を契機として、浜松城がもつ歴史情報を活かした整備が進められています。

絵図に描かれた浜松城　江戸時代に浜松城を描いた絵図が残されており、城郭の構造など検討する上で必要な情報が記録されています。「青山家御家中配列図」は、17 世紀後葉に浜松城主を務めた青山氏により作成されました。浜松城の曲輪配置や番所、寺社、町屋が描かれています。「安政元年浜松城絵図」には、浜松城の構造とともに嘉永７（安政元）年（1854）年 11 月４日に発生した安政東海地震の被害状況が記されています。このほか「浜松城二の丸絵図」（８頁左下）は、17 世紀後葉の二の丸御殿の詳細を描いた絵図です。政務を執行する政治空間「表御殿」を青色、城主の居住空間「奥御殿」を赤色で描き、部屋割りなどの詳細がわかります。

浜松市博物館蔵「青山家御家中配列図」（17世紀後葉・調査区周辺拡大）

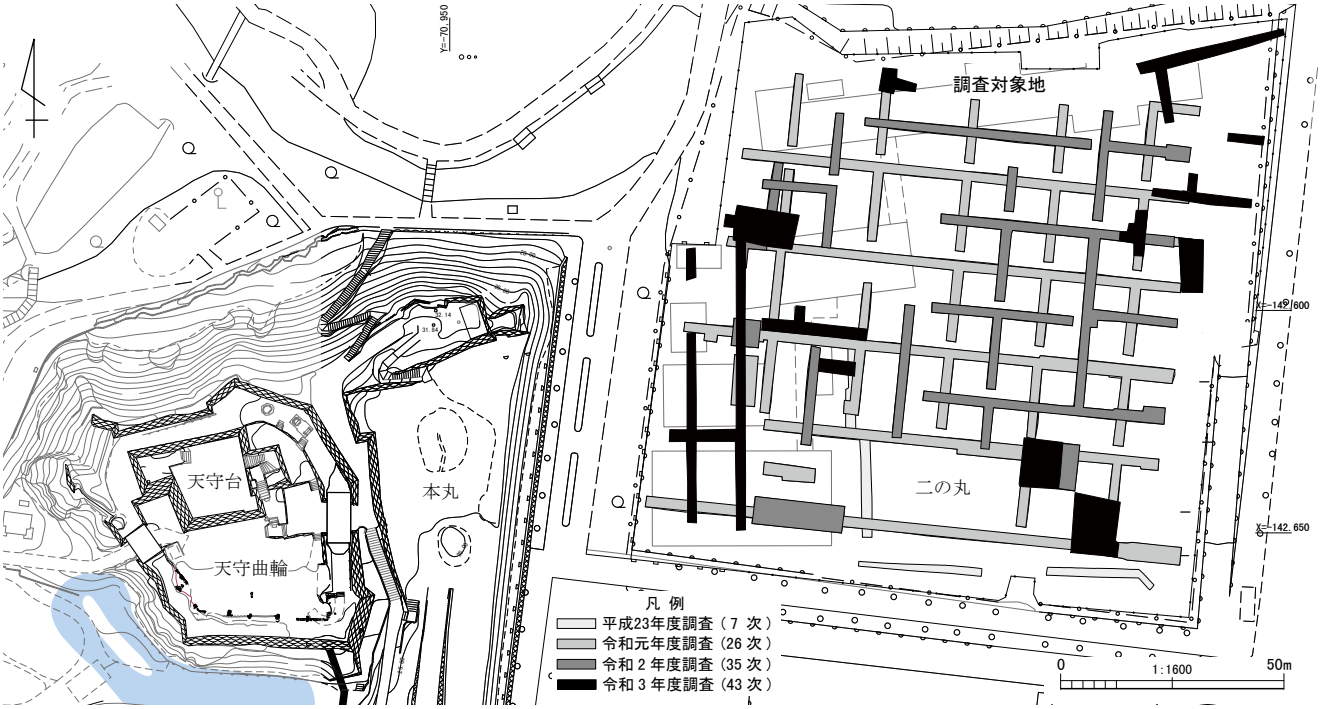
段階	上級領主等	城主等	西暦	和暦	浜松城出土瓦	浜松城の築城等	おもなできごと
第0段階							6・7世紀：横穴墓・古墳造営
第1段階 引間城	足利（将軍家）：義稙、義晴、義藤、義輝、義栄、義昭 今川	（巨海新左衛門尉） 飯尾賢連 乗連 連龍	1565	永正 1521 大永 1528 享禄 1532 天文 1555 弘治 1558 永禄		引間城の築城か	1560年：桶狭間の戦い 1565年：今川氏真、飯尾連竜を殺害 1568年：徳川家康、遠江に侵攻
第2段階 浜松城	徳川	徳川家康 （城代：菅沼定政）	1570 1580 1586 1590	1570 元亀 1573 天正		浜松城の築城 度重なる浜松城の改築 （1578〜1581）	1570年：家康、浜松城築城開始 1572年：三方ヶ原の戦い 1579年：築山殿と信康を殺害・秀忠誕生 1582年：天正壬午の乱（戦国大名武田家滅亡） 1586年：家康、秀吉の臣下となる
第3段階	豊臣	堀尾吉晴 忠氏	1600	1592 文禄 1596 慶長		織豊系城郭浜松城への改築	1590年：家康、関東移封 1591〜1598年：文禄・慶長の役 1600年：関ヶ原の戦い 1601年：家康、東海道に伝馬制を制定
第4段階	徳川（将軍家）：家康、秀忠	松平忠頼	1601 1609				
	秀忠	水野重仲	1619	1615 元和		近世城郭浜松城への改築 東海道を基準とした大手門の設置と三の丸造営	1616年：家康没する
	家光	高力忠房	1638	1623 寛永			
	家光	松平乗寿	1644				
	家綱	太田：資宗、資次	1678	1644 正保 1648 慶安 1652 承応 1655 明暦 1658 万治 1661 寛文 1673 延宝	 太田氏桔梗紋軒丸瓦 		1655年：大風雨により、浜松城内に被害 1675年：小天竜が彦助堤により締切り
	綱吉	青山：宗俊、忠雄、忠重	1700	1681 天和 1684 貞享 1688 元禄	 青山氏無字銭紋軒丸瓦		1680年：大風により、浜松城内に被害 1691年：城内の屋敷で火災 1700年：城内の屋敷で火災
	家宣、家継、吉宗	本庄（松平）：資俊、資訓	1702 1729	1704 宝永 1711 正徳 1716 享保	 本庄松平氏 繋九目結紋軒丸瓦	宝永地震により被害を受ける 天守台付櫓・富士見櫓修理か	1706年：城内の屋敷で火災 1707年：宝永地震
	吉宗	松平：信祝、信復	1749	1736 元文 1741 寛保 1744 延享 1748 寛延			
	家重	松平（本庄）：資訓、資昌	1758	1751 宝暦	 本庄松平氏 繋九目結紋軒丸瓦		
	家治、家斉	井上：正経、正定、正甫	1800 1817	1764 明和 1772 安永 1781 天明 1789 寛政 1801 享和 1804 文化	 井上氏井桁紋軒丸瓦		
	家斉、家慶	水野：忠邦、忠精	1845	1818 文政 1830 天保	 水野氏沢瀉紋軒平瓦（縮尺不同）　沢瀉紋鬼瓦の破片	鉄門東櫓を修理（1822）	
	家慶、家定、家茂、慶喜	井上：正春、正直	1868	1844 弘化 1848 嘉永 1854 安政 1860 万延 文久 元治 慶応	 井上氏井桁紋 軒丸瓦	安政地震により大きな被害を受ける	1854年：安政地震 1860年：天竜川が決壊し、城下に被害
		（徳川家達）	1871	1868 明治			1868年：戊辰戦争、大政奉還、新政府樹立
第5段階				明治 1912 大正 1926 昭和		廃城・払い下げ	1873年：廃城令 1948年：二の丸に浜松市立元城小学校移転開校 1950年：浜松城公園開設 1958年：復興天守閣建設 1959年：浜松城跡を浜松市の史跡に指定
第6段階				1945 1989 平成 2019 令和	0　20cm		2014年：天守門再建 2017年：中部学園開設 2021年：市史跡を追加指定

２.調査の成果

調査地の概要　今回の調査対象地は、浜松城のうち、本丸・御誕生場（２代将軍徳川秀忠誕生伝承地）・二の丸にあたります。浜松城の廃城後は、住宅地や工場用地等に利用されました。昭和 23 年（1948）には、浜松市立元城小学校がこの地に移転開設され、平成 29 年（2017）まで所在していました。

調査の方法と経緯　元城小学校跡地を対象とした発掘調査は、浜松市都市整備部緑政課の依頼を受け、令和元年（2019）から継続して浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施しています。令和３年度の発掘調査は、令和３年（2021）６月から実施しました。

令和元・２年度調査では、対象地の広範囲において浜松城にかかわる歴史情報が良好な状態で埋没していることが明らかになりました。なかでも、本丸北東隅石垣と本丸東堀を確認し本丸の規模や構造が判明したことや、二の丸御殿の建物基礎とみられる遺構を確認したことが特記できます。それらの成果を踏まえ令和３年度の調査は、本丸石垣や二の丸御殿の構造をより明らかにすることを目的として、令和２年度の調査区を拡張し補足調査を行いました。また、二の丸外辺部の遺跡の残存状況や内容を明らかにするため、調査対象地の北東部を中心に幅２ｍ程度の調査区を設け調査を行いました。検出遺構は原則として平面検出に留めましたが、一部の瓦集積や溝状遺構などについては、規模や時期を確認するため、部分的に掘削を伴う調査を実施しました。



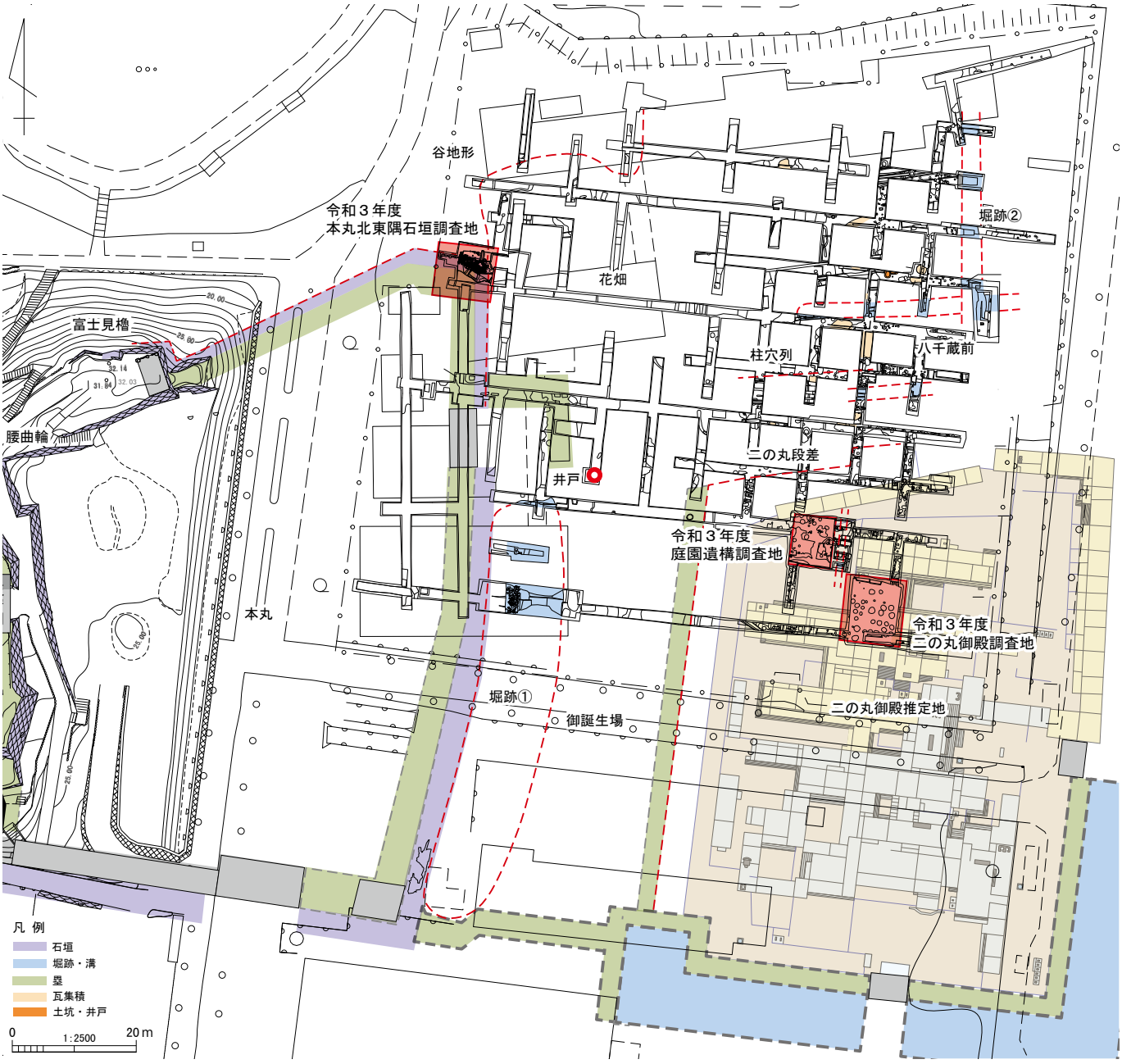
調査区配置図

令和元年度調査（26次）オルソ画像

令和２年度調査（35次）オルソ画像

令和３年度調査（43次）オルソ画像

（１）元城小学校跡地における調査成果



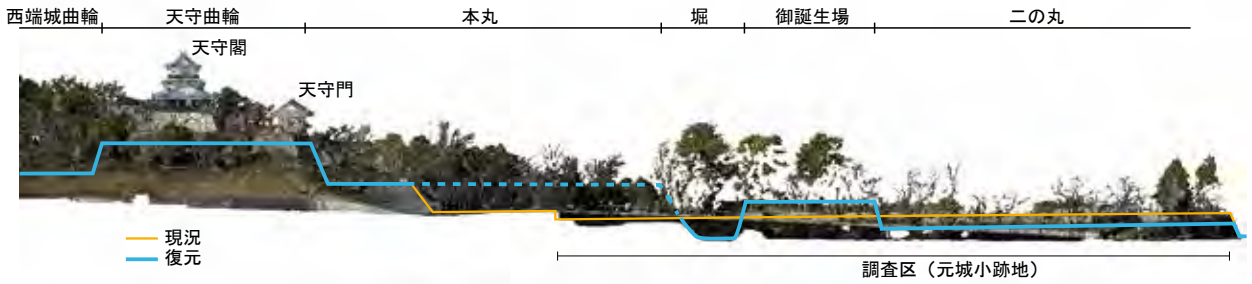
令和元年度～３年度検出遺構

検出遺構の概要　令和３年度の発掘調査により、調査対象地には浜松城の本丸・御誕生場・二の丸の構造に迫る歴史情報が良好な状態で埋没していることが判明しました。また、戦国時代から近代に至る時期の遺構が確認でき、調査対象地をめぐる土地利用の変遷が明らかになりました。

令和３年度の調査では、本丸北東隅石垣の残存状況を把握するとともに、石垣の特徴を明らかにすることができました。

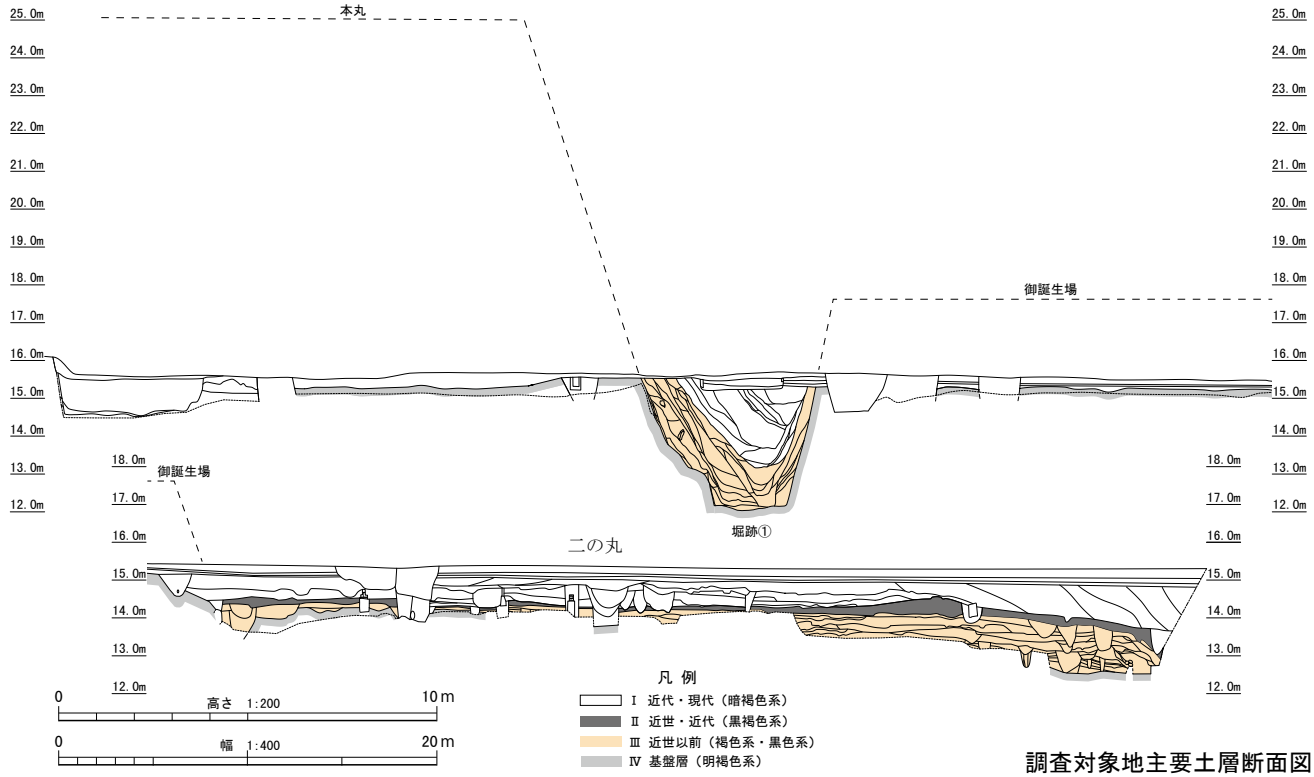
二の丸奥御殿に相当する位置では、礎石や礎石据付穴といった建物基礎の痕跡に加え、雨落ち溝を検出しました。また、二の丸の北西隅では江戸時代の庭園遺構を検出し、二の丸御殿に庭園があったことが明らかになりました。

（２）浜松城の構造と調査区の土層堆積



浜松城の構造（南からみた調査対象地周辺）

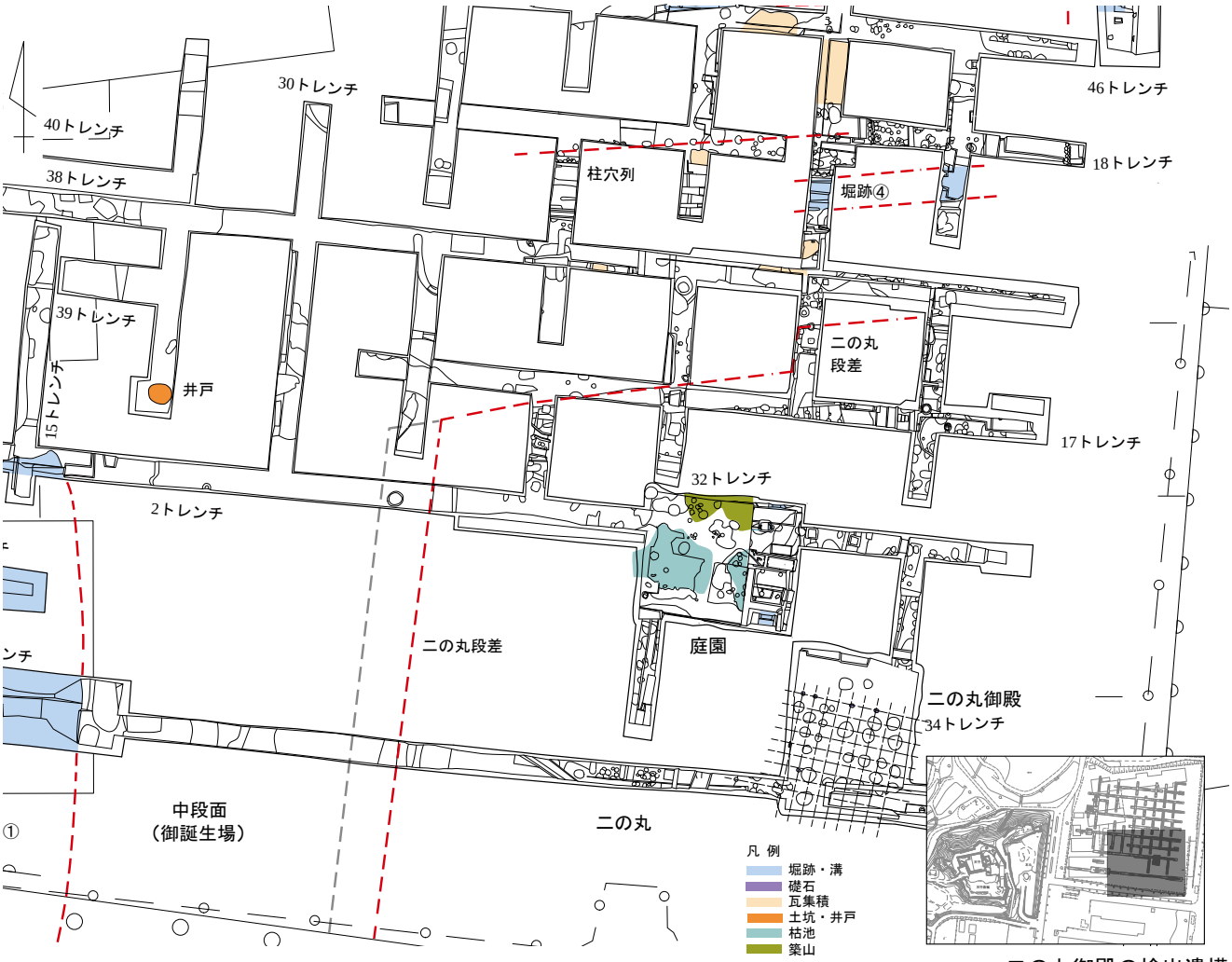
これまでの調査により、浜松城の本丸・御誕生場・二の丸の構造が明らかになってきました。東側から西側に向かい、雛壇状に高さを増し天守閣や天守門がある天守曲輪が最も高い位置にあります。御誕生場と二の丸の境界では、1.２ｍ程度の段差が確認でき、二の丸が一段低い場所にあったことがわかりました。 調査対象地では、上段面に本丸が位置し、中段面に御誕生場、下段面に二の丸と続きます。



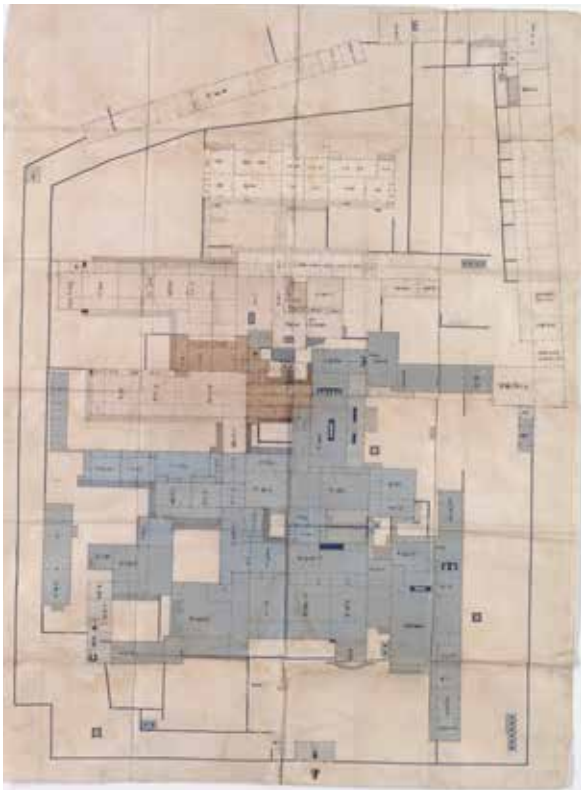
調査対象地主要土層断面図

土層堆積状況　基盤層の検出標高が高い調査対象地西側では、現代の表土・造成土の直下で遺構や基盤層を確認しました。いっぽう、基盤層の検出標高が低い二の丸御殿部分では、下層から基盤層、戦国時代以前の遺構と堆積土（第０～３段階）、江戸時代の盛土と遺構面・堆積土（第４段階）、近代の造成土と煉瓦造り建物の基礎や近代の市街地の痕跡、アジア太平洋戦争による焼土と瓦礫集積層（第５段階）、現代の表土と小学校のグラウンド造成土（第６段階）が確認できました。なお、戦国時代の堆積層と江戸時代の御殿の地表面との間には約１ｍの盛土層がみられ、二の丸御殿建設にあたり大規模な土木工事が行われたことがうかがえます。

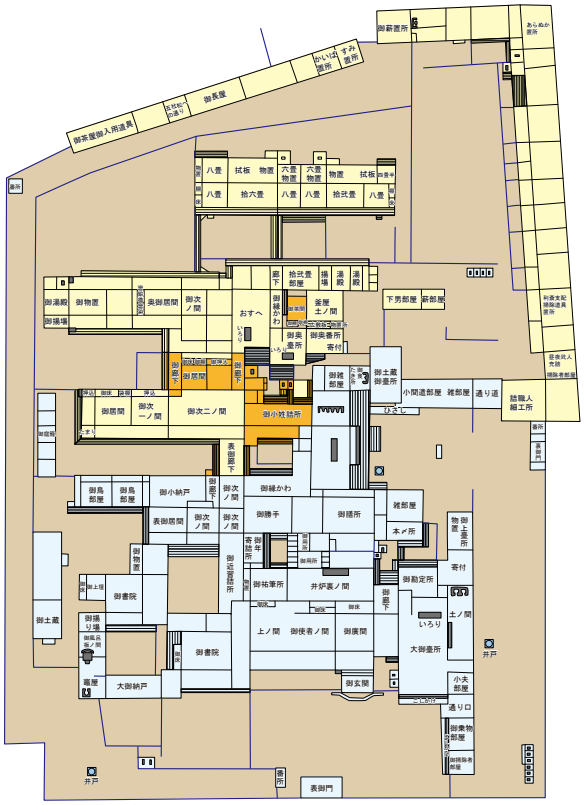
（３）二の丸御殿の調査



二の丸御殿の検出遺構



「浜松城二の丸絵図」

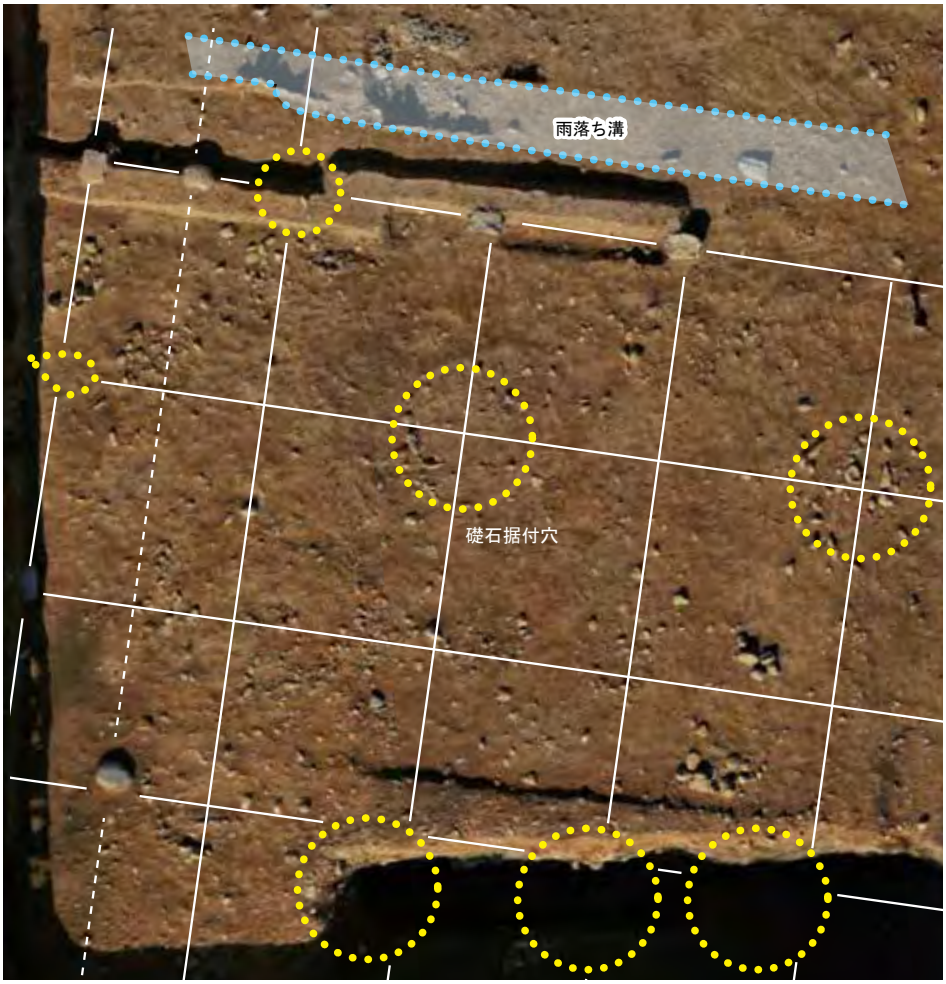


二の丸御殿の構造（「浜松城二の丸絵図」をトレース）

二の丸御殿の建物遺構

令和３年の調査で二の丸御殿の建物基礎を発見しました。確認した遺構は、柱を支える礎石や礎石の据え付け穴、軒先の雨水を受ける雨落ち溝などです。礎石と礎石の中心間の距離は約２ｍであることから、建物は６尺５寸（1.97m）を基準とした京間を用いた建物といえます。出土遺物や土層堆積状況から、江戸時代の二の丸御殿の基礎と考えられます。

また、東西に並ぶ礎石の北側には、瓦で側面を囲った「雨落ち溝」を検出しました。雨落ち溝が設けられていることから北側に開けた部分であることが判明しました。瓦の出土量が少ないことから、屋根の大部分は柿葺きであったとみられます。

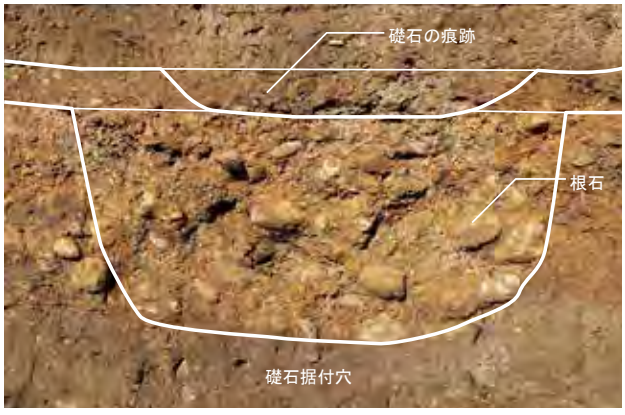


検出した二の丸御殿の基礎配置と雨落ち溝

礎石と雨落ち溝　建物基礎（礎石）６石と礎石を設置するために掘られた穴（礎石据付穴）や礎石の痕跡を６箇所以上確認しました。また、礎石列の北側には雨落ち溝が敷設されていることも明らかになりました。列をなした礎石と雨落ち溝を確認できたことは、発掘調査成果と二の丸御殿を描いた絵図を照合する有力な手がかりとなります。

礎石と雨落ち溝

礎石据付穴　整地した地盤に、直径0.6～0.8m、深さ0.6m程の穴を掘り、根石と呼ばれる礫を敷き詰め、その上に礎石が据え置かれていました。礎石が取り外されたものでも、礎石据付穴や礎石が抜き取られた痕跡から礎石の配置を推定することができます。



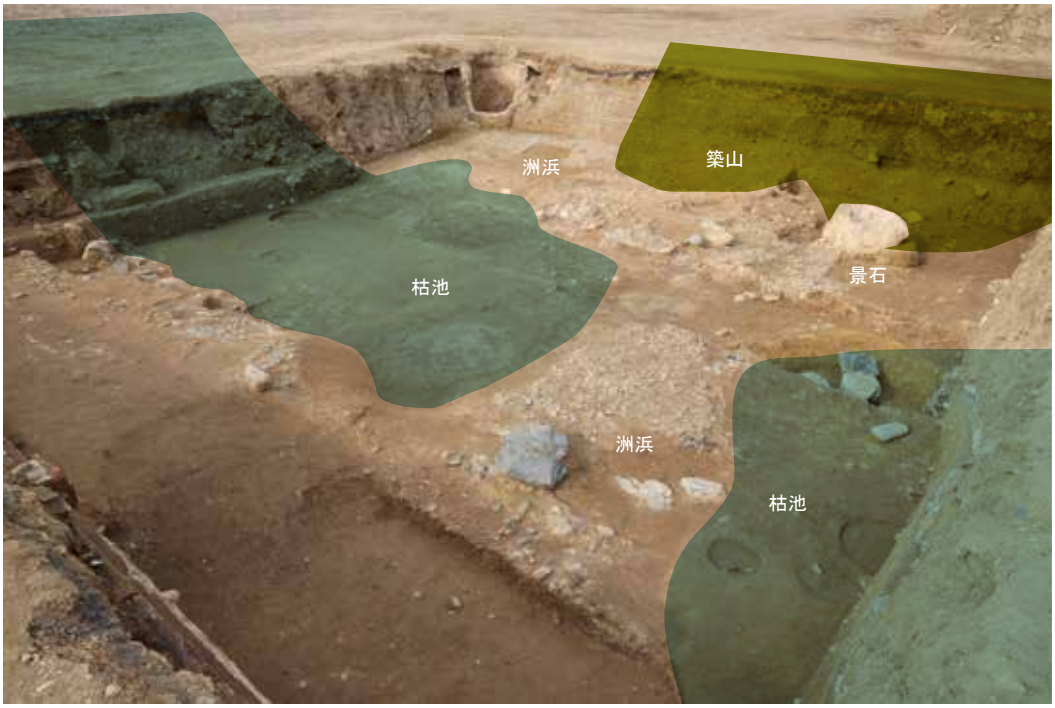
礎石据付穴

二の丸御殿の庭園遺構

二の丸の北西隅で洲浜、築山、景石、枯池により構成される枯山水庭園を検出しました。庭園遺構は、二の丸御殿の生活空間である「奥御殿」に付属したものと捉えられます。なお、「浜松城二の丸絵図」をはじめ、浜松城を描いた絵図には庭園は表現されておらず、絵図からはうかがい知ることができない二の丸御殿の様相が発掘調査により明らかになりました。

庭園遺構（北東から）

枯山水庭園　二の丸御殿北西隅で庭園を検出しました。水を用いず石や砂利等で山水風景を表現した庭園と捉えられます。円礫を敷き詰めた岸辺空間である洲浜、大型のチャートを用いた景石、三和土を用いた枯池によって構成されています。景石の北側には、庭園内に築かれた人工の山である築山と捉えられる痕跡も認められます。



庭園遺構（南東から）

庭園遺構は枯池内から出土した瓦の時期から江戸時代のものと捉えられます。

発掘調査により確認した庭園遺構の範囲は東西約９ｍ、南北約10ｍにおよびます。

庭園は南からの景観を意識して作られています。手前に洲浜と枯池が広がり、景石の背後に築山が控えています。庭園の南側には奥御殿の中でも重要な空間があったと推定できます。

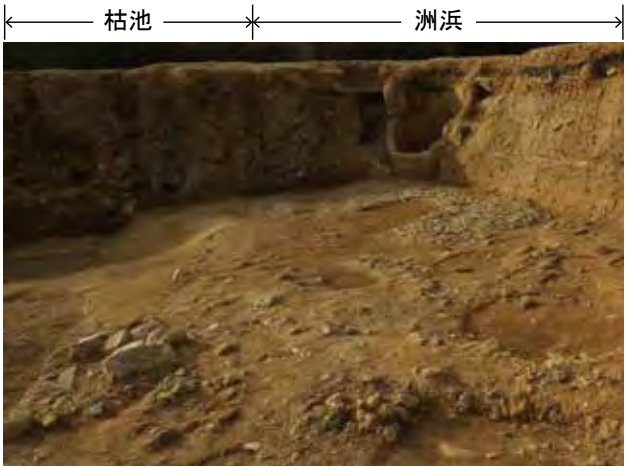
庭園遺構の詳細（南東から）

洲浜・築山と景石　小型の円礫が敷きならされた部分は、洲浜と呼ばれます。洲浜には高低差があり、円礫が見られない北側部分には築山があったとみられます。

景石には、長辺0.8m、短辺0.6m、高さ0.5mほどあるチャートが用いられています。

枯池と洲浜　枯池は三和土を用いてつくられています。枯池底部の三和土は西側中央部が最も低くなっています。洲浜と枯池の境界部分では、洲浜の末端を覆うように三和土が施されています。枯池の平面形は不整形で、南北約５m、東西は調査区外に続くため10m以上の規模と捉えられます。

洲浜・築山と景石



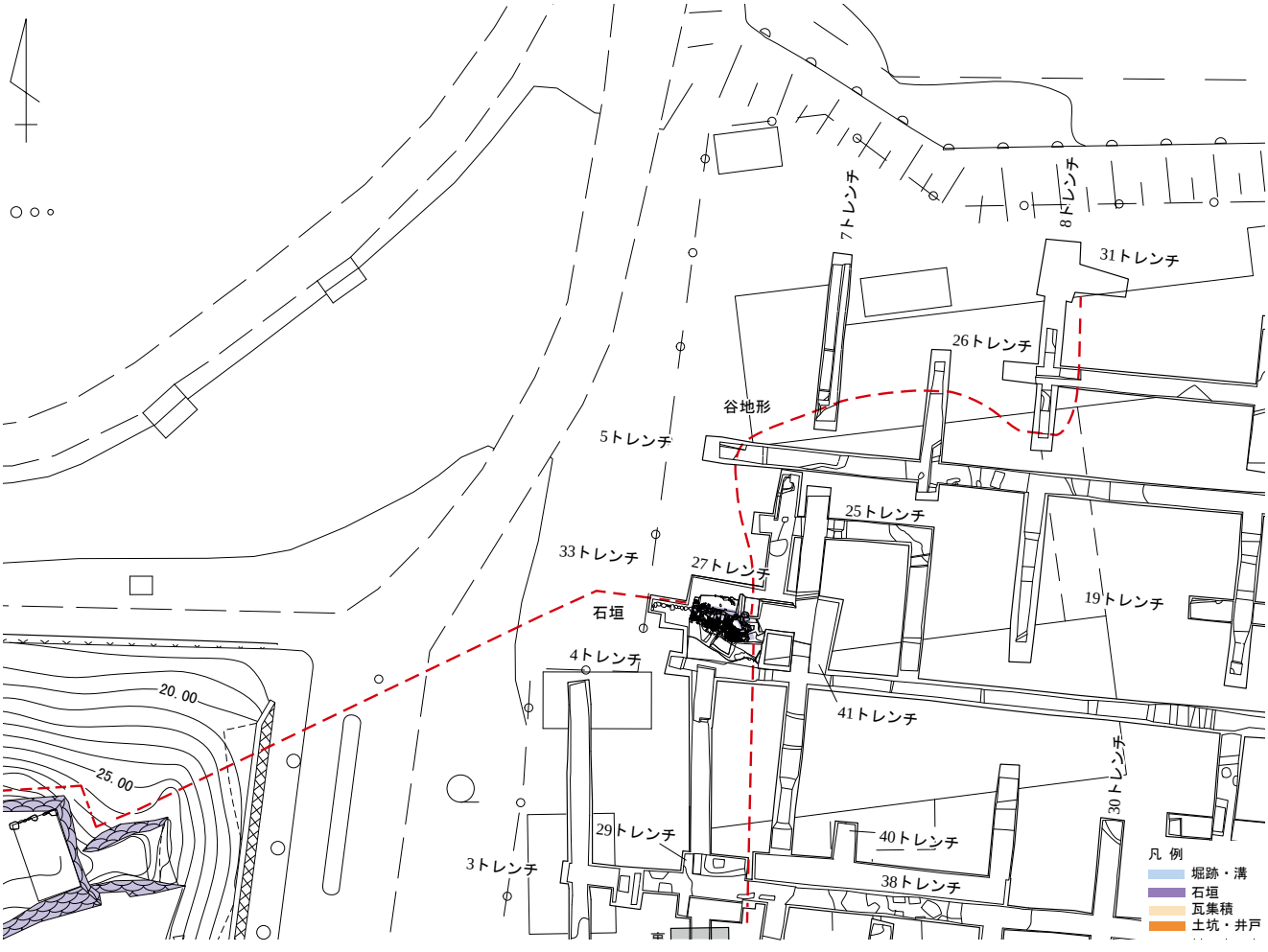
枯池と洲浜

（４）本丸北東隅石垣

本丸北東隅石垣は、調査対象地北西部で検出しました。地中に埋もれていたため、令和２年度の調査で発見されるまでの間、絵図から存在をうかがい知ることができる程度でした。

発掘調査により隅角部が検出でき、本丸の規模が明らかになりました。石垣は野面積み技法が用いられ間詰石には円礫が多用されています。天守曲輪の石垣との共通性から、1590年から1600年の間に浜松城主を務めた堀尾氏が築いた石垣と想定できます。

北面の石垣は調査対象地から西側の富士見櫓へと続く部分についても残存している可能性が高まりました。



本丸北東部の検出遺構

本丸北東隅石垣検出状況

石垣の詳細

東西に伸びる石垣北面において、根石の下及び前方に幅20cm程度、深さ幅30cm以上の規模で、栗石が敷き詰められている様子を確認しました。根石（石垣の最も下にある石）を固定するための地業の痕跡とみられます。南面の石垣では石垣前面の栗石層がみられないことから、地形や地質に合わせて工法が選択されたとみられます。

北面や東面の上部は、石垣の表面が平滑に仕上げられていますが、東面の隅角付近では、根石から上へ３石までの範囲において、石垣面に凹凸がみられます（写真中黄色の点線より下の範囲）。凸凹がみられる下３石は人為的に埋められており、石垣構築時から埋めることを前提にしていたと考えられます。

崩落した築石とかわらけ

本丸北東隅石垣の北側では、石材が集中して出土しました。地震等によって石垣が崩落した痕跡と想定できます。さらに、崩落した石垣の上から完形のかわらけが出土しました。かわらけは19世紀頃のものとみられ、石垣の崩落は19世紀のことと捉えられます。

北面石垣前面の栗石

石垣表面の違い

崩落した築石とかわらけ

（5）主な出土遺物と出土状況

瓦を集めて廃棄したとみられる瓦集積や堀の埋土を中心に戦国時代から江戸時代の浜松城に関わる遺物が多数出土しました。瓦集積は二の丸の外周部を中心に分布がみられます。出土した瓦は江戸時代のものが主体です。二の丸の建物に瓦が多く用いられたのは、江戸時代以降であったことがうかがわれます。

瓦集積

鬼瓦出土状況

内耳鍋

底部に一部欠損があるものの、ほぼ完形です。16世紀後半ー17世紀前半のものと捉えられます。胴部上半内側に二つの把手を有しており、把手の付された位置から緩やかに外反しています。屈曲部以下の胴部外面には、ほぼ全面に炭化物が付着しています。

家紋瓦

複数の家紋瓦が出土しました。18世紀に城主を務めた本庄（松平）氏の家紋「繋九目結紋」をあしらった軒丸瓦が２点、鬼瓦が２点出土しました。

対象地における発掘調査では、「繋九目結紋」をあしらった瓦が他の家紋瓦に比べて多く出土しています。本庄（松平）氏が城主を務めた時期に瓦葺き建物の建築や修理が行われたことを示していると捉えられます。

「繋九目結紋」を有した鬼瓦は、比較的遺存状態はよく、最大幅約50cm、高さ約20cmの大きさです。頭には繋九目結紋があしらわれ、家紋の周囲には竹管文が充填されています。鬼瓦の左右には雲が付き、下端はほぼ水平に造られています。

鬼　瓦

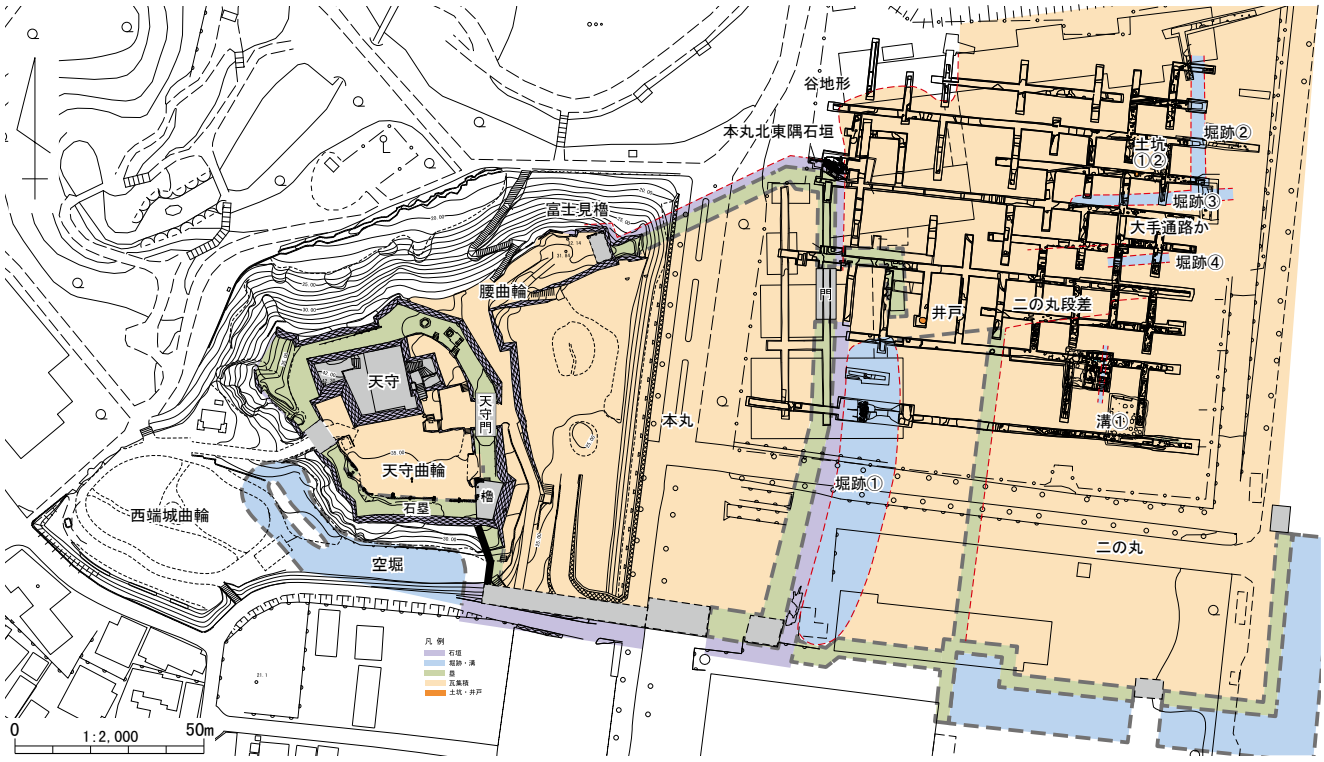
軒丸瓦

軒丸瓦

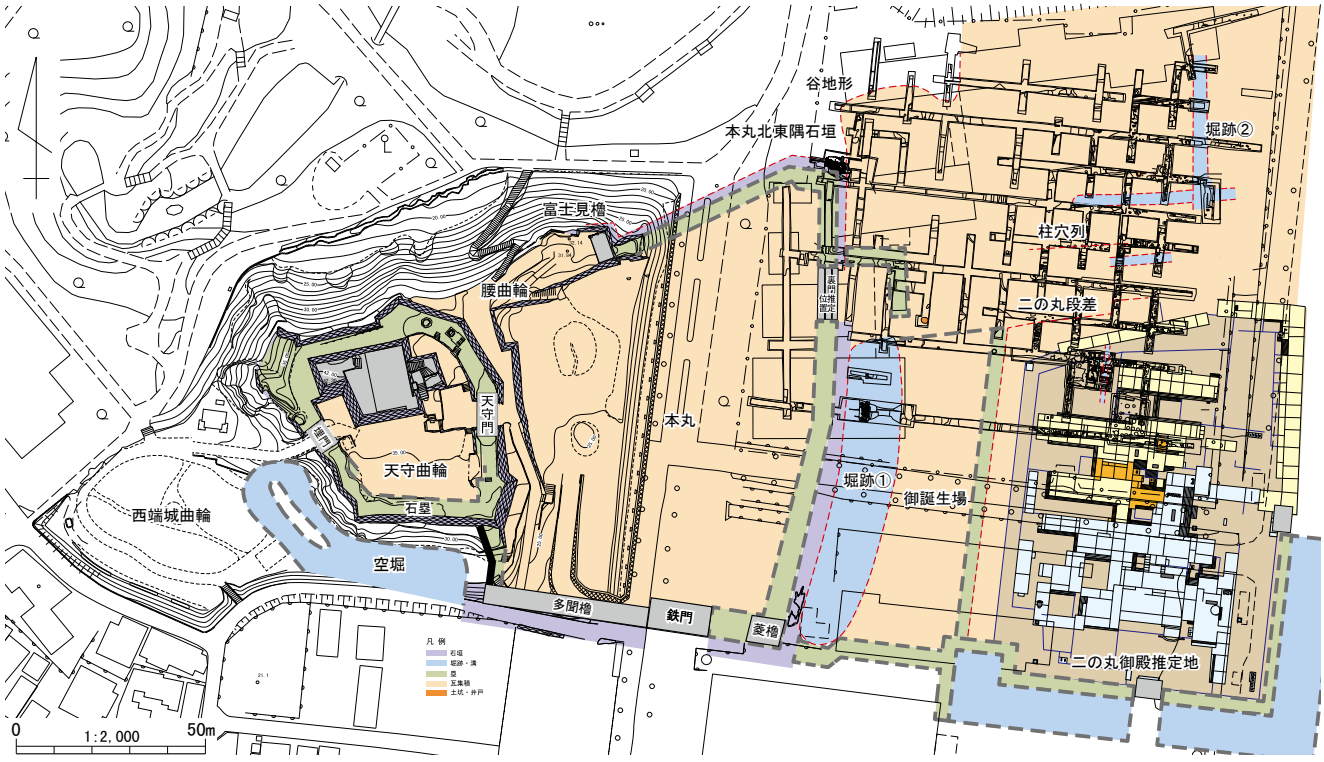
３.課題と展望

令和３年の調査の大きな成果として次の３点があげられます。①本丸北東隅石垣が調査対象地を越え本丸方向（西側）へ向かって遺存している可能性が高いことが判明しました。②二の丸御殿の礎石配列の一端が明らかとなりました。③二の丸において絵図に描かれていない庭園遺構を確認しました。

二の丸御殿は、礎石配列等から絵図と比較検討し遺構の位置付けが可能です。西側へ広がる庭園遺構は全体像の把握が求められます。絵図と発掘調査の成果を総合的に検討し、浜松城の実態に迫っていきます。なお、３年間の調査成果をまとめた発掘調査報告書を令和４年度に刊行します。



安土桃山時代（堀尾氏在城期）を中心とした時代の遺構（一部、戦国時代を含む）



江戸時代の遺構　※御殿などの建物の位置は推定

報 告 書 抄 録

書名（ふりがな）	浜松城跡43次調査の概要　（はままつじょうあと43じちょうさのがいよう）
編著者名	和田達也・長谷川敦章（編）
編集機関	浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466
発行機関	浜松市教育委員会
発行年月日	2022年3月18日

ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はままつじょうあと 浜松城跡	静岡県 浜松市 中区 元城町	22131	01-04-14	34度 42分 45秒	137度 43分 30秒	2021年6月1日 ～ 2022年3月18日	1,088㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城跡	城跡	戦国時代 安土桃山時代 江戸時代	石垣 堀跡 瓦集積 礎石 庭園	瓦 陶磁器 土師質土器	本丸北東部隅の石垣の規模と構造を確認。二の丸御殿推定地において御殿建物の基礎および庭園を確認。

要約

浜松城公園長期整備構想に関わり、令和元（2019）年から旧元城小学校跡地を対象として、浜松城跡の本丸、御誕生場、二の丸部分にあたる当該地の確認調査を実施し、令和３年度が３年目である。本丸北東隅石垣は安土桃山時代に構築された石垣の特徴を良好な状態で残していることが明らかになった。また、北面の石垣が調査対象地の西端まで良好な状態で残っており、公園内でも残存している可能性が高いことが明らかになった。二の丸御殿では、御殿の建物基礎である礎石や礎石据付穴の平面プランを確認し、近世浜松城の中枢部の建物に関わる重要な歴史情報を得た。また、御殿に付随する庭園を検出した。絵図には描かれていない二の丸御殿の実態に迫る貴重な情報を得た。

浜松城跡 43 次調査の概要

2022 年 3 月 18 日

発　　行　浜松市教育委員会

編集　浜松市市民部文化財課
（教育委員会の補助執行機関）
〒430-8652　浜松市中区元城町103-2

印　　刷　中部印刷株式会社